

主君である藩主が水瀬十蔵と駒場一郎のために用意してくれた、ほうびの品を多門はあずかってきていた。

青年の部で勝ち抜いた十蔵には、藩主の家紋がししゅうされた袴^{かまも}。りっぱな絹の着物と半袴もついている。

仕える家の紋が入った袴や羽織をさずかるのは、武士にとつてはめいよなことである。多門の屋敷に居候する浪人の十蔵にとつては尚のこと、ほまれの高いおくりものだ。

「御上はおぬしをたいそうお気に召しておられたぞ。折を見て今一度、技をご覧になられたいとおおせじや。その折に心ない者どもから後ろ指をさされぬようにと、おそれおおくもご紋つきをくだされたのだ」

笑顔で語る多門の後ろには衣桁が置かれ、家紋が見えるように袴をかけてある。主君の家紋に尻を向けるのは無礼にあたるため、多門は体をずらして座っていた。

「おそれいまする、井坂どの……」

十蔵はぎこちなく答えると、多門がさかずきについだ酒を飲みほした。

それを見届け、多門は一郎に語りかけた。

「そなたも大儀であつたのう、一郎」

「……めんぼくしだいもありません」

答える一郎の表情は、十蔵よりもぎこちない。

「ははは、何もしよげることはあるまいぞ」

まるい頬をこわばらせた一郎にほほえみかけつつ、多門

は衣桁の下に置かれた刀架に視線を向けた。

「御上のおかげで、そなたを元服させる折の楽しみがまた増えたわ。ありがたきことじや」

かざられた大小の刀は、一郎へのほうびの品だった。

武士の子は元服すると前髪を落として月代をそり、大人と同じ髪形にした上で刀を帯びることを許される。決勝で敗れたものの、大人顔負けの剣術の腕を見せた一郎に藩主は感心し、元服するときのためにと用意させたのだ。

めいよなこととわかつているはずなのに、ずっと一郎ははずかしそうにしていた。

それもそのはずで、勝ち抜いた志木三太がさずかつた刀はりっぱなこしらえつきだが、一郎の刀には白木でつくられた休め鞆しかついていなかった。負けたからにはほうびの品に差があるのも当然だが、相手の三太が仲よしだった幼なじみだけに、くやしさがつきないのだろう。

「しつかりしなさいよ、一郎ちゃん」

となりに座った奈緒が、ちいさな声で呼びかけた。勝負な口のきき方はあいかわらずだが、ずっとしよげたままでいる一郎が、心配でたまらないらしい。

「父上から聞いたわよ。一郎ちゃんは試合に負けても勝負には勝っていたそうじゃない。じしんをもちなさいよ」

「……そんなことをいわれても、うれしくなんかないよ」

「一郎ちゃん……」